

# 聞名仏教

第 131 号 毎月発行  
(発行日) 2021 年 8 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/  
振替 00930 (7) 146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 何か知らぬが有難い

佐々木蓮磨

臼杵の片田舎に幸チノといふ熱心な女同行がおりました。この同行は若いころから聞法の志が厚く、東西の区別なく、信頼のできる知識に会えば、道の遠近を問わず、真剣に後を追うて聴聞したのであります。

そのうち、彼は不幸にして喉頭結核にかかり、談話も不自由な身となりました。そこで私も時々彼の病床を訪ねて話をし、また彼の質問にも答えておりました。

この同行は一文不知の無学な女性ではありませんが、信徳の然らしめるところでしよう。この同行を中心として、有縁の同行が集まり、ささやかな談合がつづけられておりました。

そのうち病勢は日に日に進み、最後は発声も困難となりましたので、法話を書いて送りましたところ、彼は臥床のまま昼となく夜となぐ、その法話を読みつづけておりましたが、遂に病状急変し、突如として瞑目しました。

ところがこの同行に、事実という一人の息子がおりまして、一時は母親を中心とする同行たちの言動に反感を感じ、いろいろと理屈を言つて、同行連中を困らせていたのですが、遂に宿善到来して、法を聞くようになりましたところ、その真剣な聞法態度は母親をし

のぐとさえ言われておりました。そのうち、彼は不幸にして喉頭結核にかかり、談話も不自由な身となりました。そこで私も時々彼の病床を訪ねて話をし、また彼の質問にも答えておりました。そのうち病勢は日に日に進み、最後は発声も困難となりましたので、法話を書いて送りましたところ、彼は臥床のまま昼となく夜となぐ、その法話を読みつづけておりましたが、遂に病状急変し、突如として瞑目しました。

に答えて、静かに息を引き取ったのであります。

この青年は、生まれつき理智にたけた方で、どこまでも理屈に合わねば承知ができぬ性質でありましたが、最後には全く理屈をすてて、ただホレボレと喜ぶ法悦の世界に出たのであります。これこそ義をつくして、義を超えたと言うべきでしょう。

近来は科学の進歩に伴い、人間の知性が発達した結果、宗教の問題も、人間の知性で解決しようとする傾向が強い様に見受けられます。最近ベストセラーになった故岸本英夫博士の「死を見つめて」は、宗教に関心をもつインテリに広く読まれて、特に「死後の世界はない」と断ぜられたことが問題となり、中には「浄土教の死活問題ではないか」とさえ極論する人もあるようですが、これは大変な間違いであります。

## 《二〇二〇年度東本願寺基金御懇志報告》

### 懇志者名 (敬称略)

青木宏克 浅野真由美 蒔進 石川紀美子 井上守 今村光志 岩谷龍 石田君代 岩田能一 植田節美 小澤謙 改発正浩 小畑住子 角谷節代 香川郁夫 加藤忠 鹿野良子 萱島聖志 川端靖雄 喜多真澄 窪ナル子 児玉慶子 佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 城越香織 白石千鶴子 寿賀晴剛 関宥江 谷村往世 津田衛一郎 土居令子 長井一江 中川政二 中野夕カ子 中村暢明 中村穂積 中村幹夫 七村文子 西山恭夫 西塚祥子 能登昇志 野原佳子 長谷川満泰 京子 濱 秀子 林久司 平田幸子 原崎佳水 福井靖弘 福村義明 前田増蔵 町百合子 宮伊勢子 三浦一浩 三宅真知子 宮野勲 宮野道子 室塚良治 村瀬松三 森野茂治 山下東洋栄 山下悦子 幾代礼四郎 亮木与志 山下秋喜 伊東清文

合計二二〇〇〇〇円 (諸経費差引後)

以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。 合掌

# 羅漢さんに学ぶ

み、遂に「死後の世界は認められない」という結論に到達されたのですが、人間の知性はいかに進んでも相対的です。ところが、宗教は絶対の世界ですから、いかに人間の優れた知性で宗教を批判しても、それは人間の頭で考えられている宗教を批判しているのみで、真実の宗教には何等の影響はないわけです。

真実の宗教は、人間の知性を放下するところに、把握せしめられる境地であります。私は現代の知性を身につけている人でも、ある転機に知性を放下して絶対の境に入り、生死を超えて永遠の世界に生きた人を、幾人か知っております。

今の幸実君が、死後の問題を聞かれて「分かりません」と答えたは、人間の知性を放下したところであり、「何かしらぬがありがたい」と言ったところは、宗教の世界に生きていく姿ではないでしょうか。

(了)

近代真宗大谷派の高僧・清沢満之師の「言行録」に、師の言葉として、

「ある時の談に（羅漢というは結構なものですな〜）と申された。すると一人が言うには「自利あつて利他を知らぬ羅漢がなぜ結構ですか」と清沢師に問いました。「今日、利他とか教化と言つて、自身身を省みる人は少ないのに、羅漢は自利を全うして虎などと遊んでいる。その姿は、そのまま吾々を教えてくれるではないか」と。

羅漢さんというのは古代インドの言葉でいうと「アールハット」（阿羅漢）の事で、無私の道理を悟つて、自らの欲と怒りと自己中心的な思い（愚痴）の煩惱を克服して、この世の何ものにも執着をしない浄らかな境地に達した人のことですが、大乘仏教の立場からは、自分だけの悟りを求め、他の迷い苦しむ人たちを

助け導くことのない人として批判されてきたという歴史があります。

しかし、ここで清沢師は「羅漢は結構だ」と。羅漢は特に人助けのような行為はしなくても、その生きていく姿そのものがすでに我々に教えているのではないかと。

釋尊の出家のお弟子は二五〇人と一般に言われています。その中で五〇〇人のお方が悟りを開かれて清らかな境地に達したといわれ、五百羅漢という言葉も生まれました。

彼らは家も持たず、財産も持たず、独身で、自らの境地を浄化することに生涯を尽くしました。その生き様は、自らの悟りを極めることばかりで他の衆生に対して積極的に働きかけないと言うことで、批判されてきた一面がありますが、清沢師は、「大乘では利他教化が強調されるが、しかしながらそれはややもすれば

自分自身を深め浄化することをおろそかにしがちになる。そういう者よりはずっと羅漢は尊い」と言われるのです。そしてその羅漢の姿そのものがすでに我々を教えてくれているのではないかと。

そういう羅漢的な生き方をした人に良寛禪師（一七五八年から一八三一年）がいます。良寛は江戸時代の人ですが、人生の後半は新潟県蒲原郡国上村（現、燕市<sup>つばめ</sup>）の国上山の山中の小庵に住み、托鉢生活をし、蓄えは殆ど無く、極めて質素な生活をした人です。それでいて、安らかで豊かな心境に生きた人でした。積極的に他者を教化をしたこともなく淡々と座禅修行を中心にして日々を送った人でしたが、その生き様は周りの人に影響を与え続け、現在も良寛を慕う人は後を絶ちません。

その人の姿、その人の日常がすでに他の人にとって自然に教えになっている、そういう人が羅漢的な人といつていいでしょう。

それは例えば、生活不安ということでも、どれだけ財を

貯えても安心できぬ人もあれば、釈尊のお弟子のように托鉢用のお鉢と衣だけで安心してゐる人もゐる。良寛のように持ち物は殆どなくても安心してゐる人もゐる。このことは持ち物の多寡によって生活不安が生まれるのではないことを証しています。

羅漢と私たちとどこが違うのでしようか。それは一言で言えば、羅漢は「食えんようになったら食わなかつたらいんだ」ということでしょう。実際、托鉢をして生を維持していた釈尊が、飢饉で村人が食うに全く困窮している頃、釈尊が村の中を托鉢をしても一食も与えられなくて、それが三日間以上も食すことができず釈尊の身体は衰弱し瘦せられたこともありました。そういうことを覚悟で修行生活をしていたのが釈尊と

そのお弟子の生活でした。いつでも生と死のぎりぎりところで生活をしていたのでそこから、それは「いつ死んでも結構だ」というものがなければ、落ち着いて生きられるはずはありません。「いつまで生き

てもいいが、いつ死んでもいい」という心境がかれらには開かれていたから、そういう生活ができたのでありましよう。良寛禅師も然り。

私たちは「食えんようになつたら食わなんだらいい」じや困るから、財産をためて自らの生存を安定的に確保しようとなつて、

「食えんようになつたら食わなんだらいい」といえるような視野が開けていく道でありましよう。真宗ではその道を本願念仏をいただく佛道と教えられます。本願の念仏を称え聞くことによつて、アミダ仏（無量寿）にであう。はかりなきいのちのアミダ仏にであうことによつて、アミダ仏に支えられ、抱かれ、一瞬も離れない事実にあう。量りなきいのちが私の主であることをほのかでも知らされるところに、死を越えているのちにあう。それが生死を超える道であります。お念仏にであうと死の畏れがなくなるのではありません。羅漢ではない凡夫の私たちはどこまでも死の不安がついてまわるのでしよう。しかし「死への不安」の思いが湧いてくるのを縁としてお念仏を聞いていくところに、お念仏の声である南無阿弥陀仏が「汝と

では羅漢や良寛禅師のような「食えんようになつたら食わなかつたらいい」といえるような、そういうことが自然

ともにいる」「汝は阿弥陀のいのちの手の中にいるのだ」「浄土へつれていく」ということを、その都度知らされ、聞かされ、この確かさを深めさせていただくのです。むしろ不活畏の心配、いわゆる思い煩いはお念仏の縁となつて、そのつどアミダ仏にであい、

## どうして仏になれますか

攝取不捨の利益をいただくのです。アミダ仏が共にいてくださることを知らされ、「食えなければ、この世を終わつていけばいい」という視野がほのかながらも開かれてくるのでありましよう。（了）

⑤ 「私たちは仏になれるでしょうか？」

⑥ 「なんで私が仏さまになれるのですか？」

先月号ではまずその「仏とは何か」について述べました。次に「私たちは仏になれるのでしょうか」ということですが、「なれます」。では「なんで私が仏になれるのですか」という問題（⑤と⑥）に移りたいと思ひます。

（仏にどうしてなれるのか）、これを伝統的な説き方で申しますと、それは仏になる因をいただくからです。仏に成る因とは何か。それが南無阿弥

行してくださつた。そして、それによつて衆生の成仏のための因を全部仕上げて、その仏になる因（功德）を南無阿弥陀仏として衆生に与えてくださる、と説かれてあります。

陀仏です。南無阿弥陀仏が仏因ですから、南無阿弥陀仏をいただいた人は仏（仏果）に成ることができなのです。なぜ南無阿弥陀仏は仏に成ることができ因か、ということですが、これについては『佛説無量寿経』に積尊は、法蔵菩薩がアミダ仏に成られる因縁の物語として説かれてあります。すなわち、アミダ仏もと法蔵菩薩の時（因位）、法蔵菩薩は一切衆生を仏にしてやりたいという願を起し、一切衆生をどのようにして仏に成らしめることができるかを長い間思惟し（五劫思惟）、それを実現するために永いご修

では仏因である南無阿弥陀仏をどのように与えてくださるかという、法蔵菩薩は十方の仏たちに南無阿弥陀仏をほめられ称えられたいと願われ、南無阿弥陀仏の名を十方の衆生に聞かしめようと誓われて、それによつて南無阿弥陀仏を私たちに与えて（回向）くださる。このようにして、衆生に南無阿弥陀仏を称えさせ、南無阿弥陀仏を耳に聞かせ、それによつて仏因を私たちに受け取らせようとされるのです。こうして私たちは称えるお念仏に於て、南無阿弥陀仏を聞かせていただく。この南無阿弥陀仏のお心、すなわち本願は、「我が名を称えるばかりで助ける、その外に何もいらない」「汝が仏になる因は全て仕上げた、この南無阿弥陀仏で助けるぞ」と聞かせてくださる。この大慈大悲の仰せを聞く時、大悲の心は私の心に響いて、「助けてくださる、

## 【住職雑感】

七月二十日に二回目のワクチン接

種を大阪駅近くの自衛隊集団接種会

場（国際会議場）で終えた。坊守は

翌日七・八度の発熱で解熱剤を飲

み、次の日には平熱となった。接種

によって何かしらの安堵感を得たの

は事実である。集団接種会場は人が

押しかけるのでもなければ、かとい

ってすいているわけでもなく、多く

の人が整然と並び、流れ作業のよう

にして事が運ばれていく。大きなイ

ベントに参加しているようである。

日本人の全員に近い人がこの接種を

受けるのであろうから、こういうこ

とは日本の歴史で初めてのことでは

なからうか。戦後に限ると、阪神の

大震災、東北の震災と原発事故に続

く大きな出来事だとおもわれる。こ

れは日本だけではなく世界的な出

来事であらう。地球温暖化による洪

水・山火事、種の絶滅それにウイル

ス感染など地球上に住む人間は運命

共同体であることを実感する。にも

かわらず各地の紛争でお互いが殺

し合っている。こうして歴史は続け

て行き、それぞれの人の人生は終わ

っていく。自己自身は結局どこへい

くのであろうか。虚しく時間を過ご

してはいけないと思いつながら、オリ

ンピックのテレビ観戦時間だけが長

くなるのを止められない。

ならせてくださるのです。

以上は『佛説無量寿経』に  
説かれている法蔵菩薩の願行  
成就に依る救済のお心です。

こうした伝統的な人類救済

の教説は本当に有り難いです

ね。そして現代では「この法

蔵菩薩の本願成就の救いが説

かれる根拠はなにか」という

救済根拠を尋ね、そこから人

間の救いを説かれるという説

法もあります。これは今日大

事ですのでそれを述べたいと

思います。

まず「人がいる」「私が今こ

こにいる」という、人が今こ

こに存在している、という存

在の事実が成り立っている、

その根拠を尋ねると、量りな

きいのちであるアミダ仏にお

いて私のいのちは存在するこ

とができていると清沢満之師

などの先達は教えてください

ます。こういう人間存在の根

拠のところのアミダ仏と人の

原関係があり、それゆえアミ

ダ仏と人は存在的に本来一つ

であります、不可分でありま

す。けれども自我を「私」と

する我が身はアミダ仏ではあ

りません。アミダ仏と私は同

じではありません、不可同で

あります。このようにアミダ

仏と人の不可分不可同の原関

係が人間成立の根拠になって

います。これを真宗では「撰

取不捨の真理」と表されてい

ると了解されます。これは大

いなる恵みの有り難い普遍的

な真理です。ただ人はこの原

関係に無知であり、この真理

に依らず、自我のみで生きて

います。これが迷いであり苦

しみの元であり罪の状態であ

ります。しかるにアミダ仏は

この撰取不捨の真理に人をあ

ずからしめたい、知らせたい、

目覚ましめたいとアミダ仏の

方から人に働きかけてくださ

る。これがアミダ仏の光明無

量のはたらきであります。撰

取不捨の真理は撰取不捨の本

願となり、撰取不捨の真言（言

葉）となつてはたらきかけ喚

びかけてくださる。「汝を撰め

取つて捨てない、ソノママナ

リデ引き受ける」と仰せられ

る。それが口に聞こえる南無

阿弥陀仏の喚び声です。この

南無阿弥陀仏のおはたらきを

聞く時、「ああアミダ仏は私と

共にいてくださる。私を抱い

ていてくださっている」「引き

受けてくださっている、ああ

有り難い」と聞かされ、知ら

されて、アミダ仏の撰取不捨

の真理に気がつく、これが撰

取不捨の利益であり、救いが

ここに成就されるのでありま

す。もはやアミダ仏とは離れ

ないという利益をいただいた

人は、この人生が終わり、人

間の身を離れるときアミダ仏

と一体となる、すなわち仏に

成るといわれるのであります。

いずれにしましても、光明

無量・寿命無量のアミダ仏は

衆生に「方便ともうすは、か

ちをあらわし、御なをしめ

して衆生にしらしめたまうを

もうすなり。」（宗祖「唯信鈔

文意」）で、光寿無量の真実は

本願というかたちをとり、南

無阿弥陀仏という御名を示し

て衆生にご自身を知らしめて

私たちを撰取してくださるの

であります。本願の御名によ

つてアミダ仏の大慈大悲を聞

き、アミダ仏にであうのであ

ります。アミダ仏にであうと、

アミダ仏が私たちの主体にな

つてくださいますから、仏に

なることができるのでありま

す。（了）

ああありがたい」と受け入れ  
ざるを得なくなるのです。そ  
こに、不思議にも南無阿弥陀  
仏の功德（仏因）を信受した  
その人に与えられて仏になる  
べき身に定まるのであります。

あるいは同じ趣旨をこうも  
説かれます。法蔵菩薩は一切  
衆生を仏にしてやりたいとい  
う願を起し、それを実現す  
るために永きご修行をされて  
一切衆生を仏にすることので  
きる、いわば救うことのでき  
る力を成就して下さった、こ  
れをアミダ仏の本願力とい  
います。この本願力を私たちに  
南無阿弥陀仏として差し寄せ  
て（回向）くださって、〈南無  
阿弥陀仏〉と私たちに喚びか  
けてくださる。「まるまる助け  
る」「引き受けるで、我に任せ  
よ」と私たちに喚びかけてく  
ださる、それがお念仏のお声  
の南無阿弥陀仏です。この南  
無阿弥陀仏の仰せを聞いて、  
「ああこんな私を」と本願力  
の仰せを聞き受ける時、不思  
議にもアミダ仏の本願力に撰  
め取られて、阿弥陀仏と離れ  
ない身となり、この本願力に  
よって、浄土に生まれて仏に